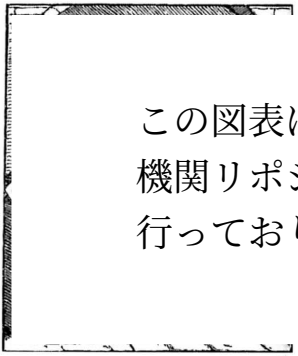
グリムの「ねずの木の話」
——或る「残酷な」昔話——

西　口　拓　子

はじめに

「ねずの木の話」は，グリム兄弟，すなわち兄ヤーコプ（Jacob Grimm, 1785-1863年）と弟ヴィルヘルム（Wilhelm Grimm, 1786-1859年）が『家庭と子どものための昔話集』（以下『昔話集』と略す[1]）に第47話として収めた昔話で，アールネ／トンプソンの『昔話の型[2]』ではAT 720番に分類される。しかしこの話は，今日のドイツで一般の読者向けに刊行される版には掲載されていないことが多い[3]。その理由は粗筋をみることで明らかとなるだろう。

a. 冬のある日，女がねずの木の下でりんごの皮をむいていると，誤って指を切り，雪の上に血が滴る。それを見て，「血のように赤く，雪のように白い子が欲しい」と思う。願いは叶うが，男児の誕生後まもなく女は死去する。夫は再婚し，女児が誕生する。
b. 継母は，木箱の中に入れておいたりんごを取るよう少年を促す。中を覗き込む少年の上に木箱の蓋を落とし，殺害する（図1参照）。
c. 継母は少年の肉でシチューを作り，父親は知らずにそれを食べる。
d. 妹（異母妹）が，少年の骨を集め，ねずの木の下に埋める。すると墓から鳥が現れる。
e. 鳥は，自分が殺害されたことを暴露する内容の歌を歌う。美しい歌に



この図表は作者の意向により、
機関リポジトリでの公開を
行っておりません

図1　シュヴィントによる挿絵[4)]

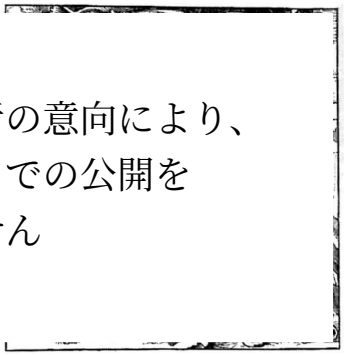


図2　シュヴィントによる挿絵
この絵には，鳥が運んで来た鎖，靴，石臼が全て描かれている。

対して，職人たちから，金の鎖，靴，石臼が贈られる。

f. 鳥は，父親と妹には金の鎖や靴を贈り，継母には石臼を与える。継母は落ちてきた石臼に潰されて死亡する（図2参照）。

g. 継母が死亡すると，少年は人間の姿に戻る。

以上の内容より，「ねずの木の話」が掲載されない理由がその残酷さにあることは明らかだろう。むろん昔話と残酷さは無縁ではなく，木箱の蓋を用いた殺人は，トンプソンの『民間伝承のモチーフ索引』[5)]では Mot. S 121. に分類され，17世紀イタリアの昔話集『ペンタメローネ』[6)]においては「シンデレラ」に相当するヒロインが，一人目の継母に対して行っている。また家族の肉を知らずに食べるという行為は，Mot. G 61. であり，日本では「かちかち山」で行われていることは周知の通りである。そして「ねずの木の話」では「小さな」という形容詞が多用され，子ども向きに語られているようでありながら，やはり気味の悪い話であること[7)]，「私たちの感覚では，残忍で忌まわしい」話であること[8)]などがドイツの昔話研究者からも指摘されている。昔話が主に子どものものと見なされる今日で

は，残酷さが問題とされ，「ねずの木の話」は，一般の読者向けの『昔話集』の選集，とりわけ廉価版には掲載されないことが多いのである。こうした傾向は，Scherfによれば，20世紀への転換期頃から見られるようになったというが[9]，残酷さに関する議論は，既にグリム兄弟が『昔話集』を上梓した当初からなされていた。

次節ではまず，『昔話集』の成り立ちを紹介しながら「ねずの木の話」がどのような経緯で『昔話集』に掲載されるようになったのかを見ていきたい。

I

グリム兄弟が昔話を集める契機となったのは，ブレンターノ（Clemens Brentano, 1778-1842年）とアルニム（Achim von Arnim, 1781-1831年）の『少年の魔法の角笛』（1805–08年）に収めるための民謡の収集に協力したことである。この民謡集はドイツで多くの詩人に影響を与えたが，ブレンターノは続編として昔話集を編む予定でいた。グリム兄弟は引き続き協力し，書き留めた昔話の原稿を1810年に彼に送付している。ところが，ブレンターノの計画は実行されず，兄弟の要請にもかかわらず，手稿も返却されなかった。グリム兄弟は念のためにとっておいた写しをもとに，『昔話集』初版の第一巻を1812年に，続く第二巻を1815年に刊行した。以降は，二巻が同時に改訂され，その作業はヴィルヘルム晩年の1857年の第七版まで続けられた。

グリム兄弟が昔話に対して行った加筆については，各版の比較により詳しい研究がなされてきた。前述の未返却の原稿も，後にブレンターノの遺品から発見され，『昔話集』の最古の形として研究に寄与している。

「ねずの木の話」は，1810年の手稿にはないが，『昔話集』には初版より収録されている[10]。これは，そもそも1806年に画家のルンゲ（Philipp Otto Runge, 1777-1810年[11]）が，「漁師とその妻の話」（KHM 19）とともに書

き留めたもので，この二話は『少年の魔法の角笛』の出版者を介してアルニムの手に渡る。彼はルンゲの許可を得た上で，1808年に自らが主宰する『隠者新聞』に「ねずの木の話」のみを発表する。

翌1809年にこの二話はグリム兄弟の手に渡り，1812年にどちらも『昔話集』（初版第一巻）に掲載され，最終版まで保持された。厳密に言えば，第五版（1843年）以降のテクストが初版のものとは多少異なっている。これは，直前に入手したルンゲの遺稿集[12]に従い，グリム兄弟がテクストを差し替えたためである。しかし，「ねずの木の話」においては，方言の表記にかかわる異同はあるが，筋にかかわる変更はなされていない[13]。

アルニムは，出版者を紹介するなど『昔話集』刊行への助力を惜しまなかった人物だが，初版第一巻の刊行直後に，グリム兄弟宛の書簡で感想を送り，いくつかの話が子ども向きでなく，掲載は不適当だという意見を述べている[14]。兄弟は，返信においては反論を試みながらも，アルニムからの指摘を受けた『屠殺ごっこの話』（初版第22番）を第二版以降は削除している。当時は，子どもの本の需要が生まれ，拡大していった時代であり，『昔話集』もその影響を受けざるをえなかったのである。各版を比較すると，グリム兄弟が改版の際に，不適当な話を削除したり，残酷なところをやわらげたり，昔話を子ども向けのものにする配慮を行っていたことが分かる[15]。ところが，アルニムが「本来の子ども向けの話とは思えないために『隠者新聞』にも掲載しなかった」という「漁師とその妻の話」も，「残酷さゆえに（子どもに）適しているとはいえない」とした「ねずの木の話」も[16]，どちらも『昔話集』の最終版まで残されている。それどころか，『小さい版』（1825年）という，子ども向けに作られた50話からなる選集にも掲載された。グリム兄弟にとってこれらの話は特別なものだったのである。

II

> 忠実さという点でも，書き留め方の適切さという点でも，ルンゲが『隠者新聞』に提供した「ねずの木の話」よりも優れている例はない。[17]

昔話の忠実な収集を目指したグリム兄弟は，ルンゲの昔話をこのように評価し，昔話収集の模範とも見なしていた。[18] この二話が『昔話集』の文体にも少なからず影響を与えたことに関しては，Rölleke らによる先行研究がある。[19]

ブレンターノもそれらを高く評価し，自らが刊行を予定していた昔話集に掲載する意向で，書簡で直接ルンゲに許可を求めているだけでなく，[20] 友人アルニムへの書簡（1813年）の中でも「ルンゲの話は，このジャンルでは完璧なもの」と称えている。[21] また，A. L. グリム（Albert Ludwig Grimm, 1786-1872年）という兄弟と同姓の人物も，1816年に出版した『リーナの昔話集』の序文でルンゲの昔話を賞賛している。[22]

その他，「ねずの木の話」は，ビュッシング（Johann Gustav Büsching, 1783-1829年）がルンゲ経由の話を1812年に，[23] ベヒシュタイン（Ludwig Bechstein, 1801-60年）がグリム版とほぼ同様のものを1853年に，[24] それぞれの昔話集に収めている。1856年には，「ミュンヘン一枚絵」にシュヴィントの挿絵を付した「ねずの木の話」が掲載された（図1，2）。

III

さて，昔話研究において，類話の体系的な収集や分析が行われるようになったのは，19世紀以降であるから，それ以前に関しては文学の中に昔話の形跡を求めることになる。なかでもゲーテの『ファウスト』第一部（1808年）の終結部に，「ねずの木の話」の鳥が囀る歌と類似のものがあること

はよく知られている。

私のひどい母さんが
私を殺した。
そして悪者の父さんが
私を食べた。
私の小さな妹が
私の骨を拾い上げ
冷たい所に埋めた。
私はきれいな鳥になり
遠くへ遠くへと飛んで行く。[25)]

写真1　ねずの木

これは，牢獄の中でグレートヒェン（マルガレーテ）が歌うものだが，ゲーテは，口頭伝承から聞いたとみられる。[26)] この場面は，『ファウスト初稿』（1773–75年）に既に描かれているため，ゲーテはグリム兄弟が『昔話集』を刊行するよりも40年も以前にこれを知っていたことになる。

その頃のドイツに，この話は口頭伝承として確かに息づいていたようだ。ブレンターノが1806年にアルニムに宛てた私信にも，幼少時に80歳の乳母からこの話を語ってもらったこと，それから妻のゾフィー（Sophie Friederike Mereau, 1770-1806年）もそれを生まれ育ったアルテンブルク（現在のチューリンゲン州）で聞いたことが記されている。[27)]

その他の文学作品にもこの昔話は姿を現している。アイヒェンドルフ（Joseph von Eichendorff, 1788-1857年）の長編小説『予感と現在』（1815年）では，主人公が次のように幼少時を回想している。「（夕暮れ時に）世話係のばあやが，僕たち兄弟にあの昔話を語ってくれた。少年が，母親に木箱を使って頭を落とされ，その後美しい鳥になり木の上で歌う話だ。」[28)] この「昔話」とは明らかに「ねずの木の話」である。アイヒェンド

写真2　ねずの木の実
写真1，2とも，ベルリン自由大学の植物園（Botanischer Garten Berlin-Dahlem）にて2007年8月13日筆者撮影。
ねずの木の実は，紫黒色で，ジンの香味付けに用いられる。

ルフは，アルニムらと交友があったため，『隠者新聞』を通してこの話を知った可能性が高い[29]。19世紀ともなると，ルンゲやグリム兄弟の影響により，口頭伝承よりも文字を通して知る可能性が高くなる。メーリケ（Eduard Mörike, 1804-75年）も，「森の牧歌」（1829年）という詩の中で，「飽きることのない話」の一つとして「ねずの木の話」を挙げているが，同じ詩の中で，グリム兄弟の『昔話集』を「お気に入りの本」と呼んでいるため，彼もおそらくその本を通して「ねずの木の話」を知ったと考えられる[30]。その他，19世紀後半にはフォンターネ（Theodor Fontane, 1819-98年）の『グレーテ・ミンデ』（1880年）の冒頭で女主人公が「お気に入りの昔話」としてこの昔話を挙げている[31]。20世紀になってからも，ツェラン（Paul Celan, 1920-70年）の詩集『誰でもない者の薔薇』（1963年）の中でこの昔話が暗示されるなど[32]，現代においても話の魅力が色褪せていないことを示している[33]。

この昔話が，ヨーロッパに限らず広い地域に伝わるものであることは，各地で収集された類話が示している。そうした495の類話をもとにBelgraderが詳細な考察を行っている[34]。先に言及した残酷さに関しても，類話の比較考察から，それがグリム版のみに見られるものではないことが確認される。本稿の末尾に，参考文献として日本で出版されている類話のリストを付したが，その多くにおいて，殺された子（少女の場合もある）

が家族に食べられている。

そうした広い分布をグリム兄弟が認識していたことは，彼らが各話に付けた注釈の記述から分かる。注釈は初版では巻末に置かれていたが，アルニムの助言もあり，第二版より『昔話集』第三巻として別冊となった。本稿では便宜上それを『注釈編』と呼ぶ[35]。注釈自体は，出典や入手先のみを示した一行だけの短いものから，12頁半に及ぶもの（KHM 82）まであり，各話により長さは異なっている。その中で彼らは，入手した類話があれば明記しており，総数こそ現代には及ばないが，それは体系的な類話収集の嚆矢として評価を受けている[36]。

「ねずの木の話」の注釈には3頁が割かれており，まずは出自がルンゲであることが示され，ドイツのプファルツ，ヘッセン，シュヴァーベンからの類話計5話が，それぞれの話の特徴的な箇所とともに紹介される。次に『ファウスト』の前述の場面を引用し，さらに，フランス，スコットランド，南アフリカにも類話があることに触れている[37]。このように各地に広く伝わる話であることも，『昔話集』に積極的に採用していた理由の一つに違いない。しかし，グリム兄弟を何よりも惹きつけた要素は他にもあるようだ。

Ⅳ

それが何であるかについての示唆は，『昔話集』序文の中にある。

> 昔話の中には，失われてしまったものと見なされている，生粋のドイツの神話があるのです[38]。」「これら伝承の学問的な価値は，いにしえの神話との，多くの驚くべき親縁関係の中に保持されてきました[39]。

比較的早い段階にキリスト教への改宗が行われたドイツには，北欧の

『エッダ』に比肩するものは残されていないが，神話は昔話の中に生きながらえていると考え，グリム兄弟はその収集に励んだのである。その他にも，早い段階から『八世紀のドイツ最古の二つの詩――ヒルデブラントの歌とヴェッソーブルンの祈り』(1812年)，『哀れなハインリヒ』(1815年)などのドイツ古代の文芸を校訂し出版している。そうした研究は，ナポレオンの制圧下にあり「最も厳しい苦難と無力のどん底の時期にあるドイツにおいて，人々を力づけ，内より奮い立たせたものであり［...］我々を没落から守ったものであった[40]」と，後に自ら位置付けている。国としての統一を欠く「ドイツ」において，人々を束ね，心の拠り所となる文化，それこそがグリム兄弟が心血を注いで研究したものであった。前述の『哀れなハインリヒ』の刊行に際して，収益を対ナポレオン解放戦争の志願兵の装備および遺族への寄金としたのも，彼らの統一への願いを表していると言えるだろう[41]。

さて，昔話と神話との関係は，『注釈編』の中で示唆されているが，やはり「ドイツ」の資料が乏しいため，北欧の『エッダ』やサガを援用して構築せざるをえない。同じ手法は，ヤーコプの『ドイツ神話学[42]』でも取られている。グリム兄弟は，1815年には『エッダ』の中の英雄伝説を共同でドイツ語に翻訳し上梓しており[43]，それら北欧研究の成果もふまえて，『注釈編』や『ドイツ神話学』での昔話と神話の関連が示唆されているのである。

では，「ねずの木の話」の注釈の残りの部分，これが本稿にとって重要なのだが，そこを考察していきたい。類話の紹介の後は，次のように記されている。

> 母親が指を切ってしまう冒頭部は，白雪姫とパルチヴァールの注目すべき箇所を思い起こさせる。このことは，『古いドイツの森』の第1巻1-30頁で説明した[44]。

「ねずの木の話」の冒頭部に関する記述はこれだけである。注釈は，概してキーワードが提示されるのみで詳細には説明されないので，少し詳しく考察しておきたい。『古いドイツの森』とは，グリム兄弟が主宰した雑誌で，そこにヤーコプが「エッシェンバッハのパルチヴァールの一箇所に関する注釈」という論文を発表している[45]。彼が注目した『パルチヴァール』第6巻は，鷹に襲われたがちょうから「雪の上に三滴の赤い血が落ちた」のを目にしたパルチヴァールが，「二滴の血に妻の頬を，三滴目の血に妻のおとがいを思い浮かべ」，我を忘れる場面である。そこで同行者のガーヴァーンがマントで血痕を覆い，彼を我に返らせている[46]。ここをヤーコプは「ねずの木の話」や「白雪姫」と関連付けているのである。確かに「白雪姫」の冒頭においても，縫物の際に后が針を指に刺し，雪の上に三滴の血が落ちているが，我々の目には，雪の上に滴る血，という点のみが共通しているだけのように見える。しかしこれはヤーコプの論考の端緒に過ぎない。まずは共通点の多いフランスのクレチァン・ド・トロワの『ペルスヴァル[47]』に触れ，その後，雪の白と血の赤に突如として黒を加え，ブラフマー，ビシュヌ，シバ神が赤，白，黒で表されるとしてインド神話にもつなげてしまう[48]。そうして引用は『オシアン』，『エッダ』，『ペンタメローネ』からシェイクスピア作品にも及び，それら全ての関連を示唆する。こうしてインド神話をも取り上げているのは，グリム兄弟がインド＝ヨーロッパに共通の源をみていたためである。これには時代的な背景，すなわち，そこに共通の祖語を追求した比較言語学の発展とも無関係ではない。ヤーコプが『ドイツ文法』で「グリムの法則」を提示したように，彼らは確かにこの学問的潮流の中にいたのである。とはいえ彼らの昔話への関心はインド＝ヨーロッパ内に限定されることはなく，『注釈編』の中ではアフリカやアジア――中国や日本についての言及も見られる[49]。

ヤーコプのこの論文に見られる，類似点を数多く列挙する方法は，A. W. シュレーゲル（August Wilhelm Schlegel, 1767-1845年）から，時に

「恣意的で，実証されていない，空虚で，無益な並置」となっている，という厳しい批判を受けた。「グリム兄弟は，同じものが他の民族や別の時代にも現れているという理由から，個々の比喩やシンボルにも，伝説や神話の概念を当てはめてしまっている[50]」というのだ。それでも同様の並置は『注釈編』の中においても行われており，多くの類似点を見出し語的に並べ，昔話を神話や古代の文芸と結びつけながらも，グリム兄弟はそれを実証することはしない。よってその中には，学問的な妥当性に議論の余地があるものも含まれてしまう。しかしそこには，『昔話集』の編纂に影響を与えている，彼らの昔話観が如実に現われているため，本稿では「ねずの木の話」の注釈の考察をさらに進めていく。そこでの言及には時折飛躍も見られるが，記述の流れに沿いつつ，見出し語的な部分に解釈を加えながら見ていくことにする。

V

注釈において，パルチヴァールの次に取り上げられるのは「骨を集める事が，オシリスとオルフェウスの神話においても語られていること[51]」で，やはり指摘はドイツのものにとどまらない。エジプト王オシリスは，弟のセトに殺され，身体を切断され投げ捨てられるが，妹で妃のイシスが遺骸を探し出し，それをつなぎ合わせ，復活させていることに着目したとみられる[52]。一方のオルフェウスは，冥界からの妻の救出に失敗した後，バックス（バッコス）の信女らに恨まれ，八つ裂きにされ，その体を野原一面に撒き散らされた上で，頭はヘブルス（ヘブロス）川に投じられるが，レスボス島に流れつき，島民によって葬られる[53]，として知られているが，「身体はムーサたちが集めて葬ったとの説[54]」もあり，グリム兄弟の意図はおそらく後者であろう。

次にグリム兄弟が着目するのは「死者の復活」であり，自らの著作の中から四点を取り上げている[55]。ここでもタイトルが明示されるのみであるの

で，補いながら見ていくと，『昔話集』には，聖ペテロの助力を得て主人公が骨から死者を復活させる「のんきもの」（KHM 81）と，殺害された姉たちの手足を妹が集めて甦らせる「フィッチャーの鳥」（KHM 46）の二話がある。『ドイツ伝説集』[56]の「溺れた子」（第一巻62番）でも，溺死した子の骨を母親が教会に持って行くと子どもが生き返っている[57]。ヴィルヘルムが翻訳した『古代デンマークの歌』にも，王妃の愛人が殺され，食卓に供されるが，泉の力で甦る歌が収められている[58]。

注釈の記述は，次に13世紀のデア・シュトリッカーによる『司祭アーミス』に飛ぶ。「虚偽ではあるが」復活が語られているというのだ[59]。内容から推測するならば，これは，第五話で司祭アーミスが，食べてしまった鶏をすり替えることにより，骨から生き返ったと信じ込ませる場面を意図しているのだろう[60]。次に話題はギリシア神話に移り，デメテルが食べてしまった肩を象牙で補いつつ，ゼウスがペロプスを骨から生き返らせていることを指摘する。

こうして様々なものが，昔話との関連を想定しつつ次々と列挙されていくが，実証されることはない。そもそもグリム兄弟はそれを目指していないようなのだ。完全なものを目指すのではなく，今後の研究の基礎資料として，あらゆる使用に耐えるように集めたかの印象を受ける。

さて，グリム兄弟が「ドイツ」神話との親近性を認めていた北欧神話に関しては注釈の最後にようやく二点が言及される。第一は「トールが食べられた山羊の骨を集め，（槌を）ふって再生させている」ことである[61]。トールはロキとともにある百姓のもとで宿をとり，そこで山羊を屠り皆で肉を食べるのだが，その場面はスノリの『エッダ』では次のように語られている。

それから，トールは山羊の皮を火のそばにひろげ，百姓とその家族に，骨を山羊皮の上に投げるようにといった。百姓の息子スィアール

ヴィは山羊の腿の骨をナイフで切り裂き，髄までこじあけた。トールはその夜そこに泊った。そして翌朝まだ明けやらぬうちに起き，衣服をつけ，槌ミョルニルを手にとって振り上げ，山羊皮を浄めた。すると，山羊たちは立ち上ったが，一頭は後脚がびっこだった。[62]

ヤーコプの『ドイツ神話学』「ドナー神」（トール）の章にも，同様に「「ねずの木の昔話」では切り刻まれた人間の復活が扱われている」[63]との記載があり，やはりドナー神との関連で捉えていたことが分かる。さらに『ドイツ神話学』の「魂」の章においても，人体から遊離した魂はしばしば花として開花したり，鳥の姿で飛翔したりするとの記述があり，その一例として，やはりこの昔話が引き合いに出されている。[64]

注釈に話を戻すと，北欧神話に関連するもう一つの記述はこうである。「頭の上に石臼が落ちるという罰が，『エッダ』のフィアラルとガラルという小人の話にある。昔話の90番の記述を参照のこと。[65]」これは，『エッダ』「詩語法」二では次のように語られているところである。

小人は兄弟のガラルに，女が外に出るとき，扉の上にあがって，女の頭の上に石臼をおとせ，女の泣き声にはうんざりしたんだといった。そして，兄弟はその通りにした。[66]

巨人ギリングの死を悼んで妻が泣きやまないのを鬱陶しく思い，ふたりの小人が，石臼を用いて彼女の殺害を試みる場面であり，「ねずの木の話」とは全く異種の話であるが，グリム兄弟がこのような話の一部にまで神話―昔話の関連を見出すことは，本稿でのこれまでの考察で見てきた通りである。注釈の最後に記された「90番の昔話」とは，「若い大男」（KHM 90）という笑い話風の話だが，ここでも，大男が石臼を頭に投げられて殺害されそうになる。こちらの注釈においてもこの昔話と北欧神話

との関連が指摘されていることは言うまでもない。[67]

石臼に押し潰されることによる死は，「ねずの木の話」では継母に「罰」として与えられているが，ここにもヤーコプは古代の法の名残を見出している。ヤーコプの『ドイツ法古事誌』（1828年）は二巻からなる大部の著作で，古代の法や刑罰を扱っているが，犯罪者への死罪のひとつとして，13番目に「石臼を頭上に落とすこと」を取り上げ，そこでも「ねずの木の話」の参照を指示している。[68] 古代の法や刑罰もまた，昔話の中に形跡を留めていると見なしていたからである。昔話の中の罰については，それだけで一つの大きなテーマであるため，稿を改めて考察したい。

Ⅵ

以上グリム兄弟の注釈の主要な点を追ってきたが，そこに指摘はなくとも，「ねずの木の話」の中には，その他にも様々な神話や英雄伝説を彷彿とさせる場面がある。

継母がりんごを木箱の中に入れておく場面は，『エッダ』でイズン（ブラギの妻）が若返りの林檎を保管していることを連想させる。[69] また，木箱の蓋を落とすことによる殺人（前述 Mot. S 121.）は，『エッダ』のヴェルンドがニーズズ王の息子ふたりに対して行っている。[70]

（継）子が殺害され，父親がその肉を知らずに食べること（Mot. G 61.）と古代伝承との類似点には，グリム兄弟以外の研究者も着目してきた。[71]『ヴォルスンガサガ』では，グズルーンが夫のアトリ王に実子を，[72] ギリシアでは，ペロプスの息子アトレウスが，弟テュエストュス（トゥロス）に弟の子三人を，オウィディウスの『転身物語』（巻六）では，ピロメラが夫テレウスに実子のイテュスを，[73] それぞれ殺して食べさせている。ピロメラの行為は，夫が妹のプロクネを犯した上に密告できぬよう彼女の舌を切ったことに対する復讐だが，この物語は，ウェルギリウスの『牧歌』の第六歌においても次のように歌われている。

あるいは，テレウスの五体の変身がどのように語られ，
ピロメラが彼にどのようなご馳走を，
どんな贈り物を用意したか，また
彼女がどんなふうに飛んで荒野をめざし，その前にどのように翼を
はばたかせて，ああ不幸にも，自分の館の上を飛び回ったのかを。[74]

ピロメラとプロクネは逃亡するが，恐ろしい復讐に気づいたテレウスは，激怒して，二人を追う。その時三人は鳥に――ピロメラは夜鳴き鶯，プロクネは燕，テレウスはやつがしらに――姿を変えたという。この夜鳴き鶯の神話こそが，「ねずの木の話」に最も近く，その原型であると見なす研究者もいる。[75] しかし，同じ筋が見られるに過ぎず，間をつなぐ証拠も欠けている。やはりギリシアや北欧の神話との直接のつながりを見出すことは困難なのだが，彷彿とはさせるものがある。[76]

おわりに

「ねずの木の話」などに見られるグリムの昔話の残酷さに関しては，しばしば議論がおこる。グリム兄弟の採話・編纂方法に関しても，センセーショナルな例を挙げ，「つとめて暴力的なエピソードを挿入したり，強調したりしている」と否定的に捉えられることもある。[77] しかし，『昔話集』への加筆を包括的に考察すれば，残酷さを強調する目的で話を選択している訳ではないことが分かる。[78] 実際に，「ねずの木の話」の注釈で，グリム兄弟はモネという人物から入手した類話を紹介しているが，こちらでは，禁じられた鍋の中を妹が覗くと兄の手が飛び出すなど，[79] 恐怖心を煽るのにより効果的な描写がある。こちらを，一般の読者が読むことの極めて少ない注釈（別冊）の中で紹介するに留めていることも，彼らが残酷な方を選んでいるとは言えない根拠の一つである。[80] また，この話型の継母の残酷さは，英語とオランダ語の類話が際立っていることを Belgrader が報告し

ている[81]。グリム兄弟が注目していたのは，殺害の場面などの残虐な行為ではなく，鳥→人間という二段階を経て復活を遂げることであり，まさにそこに神話的な要素を見ていたことは本稿で考察してきた通りである。

そしてグリム版「ねずの木の話」は，後に集められた多くの類話の中では特殊な位置を占めている。冒頭での，母親が指を切り，血が雪の上に落ちる場面は，『民間伝承のモチーフ索引』では，Mot. Z 65.1. に分類されるもので，グリムの「白雪姫」（AT 709）だけでなく，『ペンタメローネ』の「三つのシトロン」（5日目第9話，AT 408）[82]などにも見られるものである。ところが，Belgrader によれば，「ねずの木の話」の話型（AT 720）には，グリム／ルンゲ版（およびこれに影響を受けた話）以外にはほとんど出現することはないという[83]。

同じことが，終結部にもあてはまる。グリム版では，殺害された少年が鳥から人間の姿に戻ることで（「二度目の変身」），昔話に特徴的なハッピーエンドを迎えるが，Belgrader が分析に用いた類話の大半では，殺人を暴露する鳥の歌で話が終わっており，人間に戻ることは語られていない。この理由としては，キリスト教圏では，輪廻，転生という下地がないことが指摘されている[84]。

つまり上記の二点において，グリムの「ねずの木の話」は類話の中では少数派と言えるが，彼らはまさにそこに神話の残滓としての価値を見出していたのである。実際には，神話とこの昔話とに直接のつながりを見出すことが困難であるとしても，上記の二点以外にも神話的なイメージに溢れる話であることは，多くの研究者が認めるところである。アルニムからの指摘を受けつつも，『昔話集』に残されたばかりか，子ども向けの選集にも収められた理由はそこにあるのだろう。グリム兄弟は，時代の要請に応え，ある程度子ども向けの配慮をしながらも，「神話」の残滓としての昔話を求めていたこと，その奥には祖国への思いが託されていたこと，そして『昔話集』は彼らの神話観を看過して語ることのできないものであるこ

とを「ねずの木の話」は教えてくれるのである。

（本稿は，2007年6月専修大学人文科学研究所定例研究会での口頭報告を基に，大幅に改稿したものである。）

注

1）Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. 通称『グリム童話』だが，本稿では原義とグリム兄弟の意図を考慮し「昔話」を用いる。なお，国際的な慣例に従い，『昔話集』をKHMと略し，言及する昔話の初出時に，最終版における番号を付して表記する。「ねずの木の話」は，KHM 47である。

2）昔話を分類し，番号を割り当てたもの。Aarne, A./Thompson, S. : The Types of The Folktale. A Classification and Bibliography. 2d rev. ed. (FFC 184) Helsinki 1961. 2004年にUtherによる改訂版が刊行され，番号の見直しも行われたが，本稿で言及する話では異動はないため，ATU番号は特に明記しない。Uther, Hans-Jörg : The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography. (FFC 284) 3 vols. Helsinki 2004. なおAT 720番は，AT 780番「歌う骨」と混交することも多い。

3）例えば，Lechner社（Wien u. a.）の『昔話集』廉価版（1992年）の編集後記には，子ども向きでない「ねずの木の話」，ユダヤ人に不当な仕打ちをする話（KHM 110），司祭との不倫を笑い話風に語った話（KHM 95）の計三話を掲載していないことが明記されている。

4）Moritz von Schwind (1804-71年)。これは「ミュンヘン一枚絵」1856年，Nr. 182に掲載された作品である。

5）Thompson, Stith : Motif-Index of Folk-Literature : A Classification of Narrative Elements in Folktales, Ballads, Myths, Fables, Mediaeval Romances, Exempla, Fabliaux, Jest-books, and Local Legends. 6 vols. (FFC 106-109, 116, 117) Bloomington 1975.

6）ジャンバティスタ・バジーレ（1575？-1632年）作。『ペンタメローネ』（五日物語）杉山洋子・三宅忠明訳，大修館書店，1995年。（2005年のちくま文庫版も参照した。）本節で言及している話は，「灰かぶり猫」（1日目第6話）である。

7）Leyen, Friedrich von der : Das deutsche Märchen und die Brüder Grimm. Düsseldorf/Köln 1964, S. 70.

8）Berendsohn, Walter A. : Grundformen volkstümlicher Erzählkunst in den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Hamburg 1921 (Nachdr. Wiesbaden 1968), S. 78.

9）Scherf, Walter : Die Herausforderung des Dämons. Form und Funktion

grausiger Kindermärchen. München u. a. 1987, S. 92.

10) 邦訳では，『初版グリム童話集 2』吉原高志・吉原素子訳，白水社，1997年，S. 23 ff.

11) 当時のスウェーデン領フォアポメルン，ヴォルガスト生まれの画家である。ドレスデンやハンブルクに住み，ティークをはじめ多くのロマン主義文学者らと交流があった。

12) Runge, Philipp Otto : Hinterlassene Schriften. Hrsg. von dessen ältestem Bruder. 2 Bde. Hamburg 1840. 長兄のダニエルが，ルンゲの遺稿を整理し出版したもの。昔話は第一部 S. 424–435所収。

13) 他方の「漁師とその妻の話」では，描写が細かくなり，テクスト全体も長くなっている。詳細は，次の論文を参照。Rölleke, Heinz : Von dem Fischer un Syner Fru : Die älteste schriftliche Überlieferung. In : Wo das Wünschen noch geholfen hat. Bonn 1985, S. 161–174.

14) Steig, Reinhold : Achim von Arnim und Jacob und Wilhelm Grimm. Stuttgart/Berlin 1904 (Nachdr. Bern 1970), S. 262.

15) その他，グリム兄弟による加筆に関しては，拙論「グリム『昔話集』——グリムの加筆と「神話」へのまなざし——」東京外国語大学大学院博士論文，2003年参照。

16) Steig 1904 (1970), S. 262.

17) この賛辞はヤーコプの「ドイツの詩と歴史を愛好する者への呼びかけ」にあるが，これにルンゲの話を模範例として添付しようとも考えていた。Steig, Reinhold : Clemens Brentano und die Brüder Grimm. Stuttgart/Berlin 1914, S. 162, 167.

18) ルンゲの話が方言で生き生きと語られていることも，グリム兄弟を強く惹きつけた。『昔話集』序文には，「ある特定の方言で語ることが出来たらどんなに幸せなことか」と記している。Rölleke, Heinz (Hrsg.) : Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Vergrößter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815. 3 Bde. Göttingen 1986, Bd. 1, S. XX.『昔話集』の中の一割の話が方言で書き留められている。それらの話に関しては，拙論参照。「グリム『昔話集』における方言による語り」『Der Keim』東京外国語大学大学院　ドイツ語学文学研究会編，第21号，1997年，S. 11–21.

19) Rölleke, Heinz : Die Märchen der Brüder Grimm. 2. Aufl. München/Zürich 1986, S. 58.『グリム兄弟のメルヒェン』小澤俊夫訳，岩波書店，1990年。ルンゲのもう一方の話に関しては,吉原素子「グリム兄弟の手本——ルンゲの『漁師とその妻の話』」『詩・言語』東京大学文学部　詩・言語同人会，第36号，1990年，S. 33–49を参照。

20) Feilchenfeldt, Konrad (Hrsg.): Clemens Brentano Philipp Otto Runge Briefwechsel. Frankfurt a. M. 1974, S. 41.

21) Oehring, Sabine: Clemens Brentano. Sämtliche Werke und Briefe. Stuttgart 2000, Bd. 33, S. 10.

22) Grimm, A. L.: Lina's Mährchenbuch. Frankfurt a. M. 1816, S. 5 f. A. L. グリムは，グリム兄弟と血縁関係はないが，同様に『少年の魔法の角笛』に寄稿をし，昔話集も出版していた。ヴァインハイムで学校教育に従事し，同市の市長も勤めた人物である。

23) ビュッシングは，グリム兄弟より3ヶ月ほど早く刊行した昔話集に，ルンゲの両話を採用している。ただしテクストは，グリム版のものとは多少異なっている。ルンゲは，少なくとも二度書き留めており，彼が入手したものは，グリムとは別の手稿だったためである。Rölleke 1985, S. 169参照。

24) ベヒシュタインは，ドイツではグリムに劣らず人気を博した昔話集の編者である。拙論参照。「グリムの同時代人，ベヒシュタイン」『Der Keim』東京外国語大学大学院，第25号，2001年，S. 29–47.『ドイツ昔話集』(Deutsches Märchenbuch) の初版は1845年だが，「ねずの木の話」は，1853年改訂版より第66番として収録された。第55番は「漁師とその妻」の類話である。

25) Trunz, Erich (Hrsg.): Johann Wolfgang von Goethe Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. München 1998, Bd. 3, S. 139.『ファウスト初稿』の該当部は，同書 S. 417.

26) Rölleke, Heinz: Nachweise zu KHM 47. In: Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Hrsg. v. H. Rölleke. Stuttgart 2006, Bd. 3, S. 462.

27) Steig, Reinhold: Achim von Arnim und Clemens Brentano. Stuttgart/Berlin 1894, S. 161.

28) Ahnung und Gegenwart. In: Joseph von Eichendorff Werke in fünf Bänden. Hrsg. v. Wolfgang Frühwald u. a. Frankfurt a. M. 1985, Bd. 2, S. 100.『フリードリヒの遍歴』神品芳夫訳，集英社，1970年。

29) Belgrader, Michael: Das Märchen von dem Machandelboom (KHM 47). Frankfurt a. M. 1980, S. 19.

30) Mörike, Eduard: Sämtliche Werke - Briefe. 2. Aufl. Stuttgart 1961, Bd. 1, S. 112.『メーリケ詩集』森孝明訳，三修社，2000年。

31) Fontane, Theodor: Werke, Schriften und Briefe. 2. Aufl. Hrsg. v. Walter Keitel u. a. München 1970, Bd. 1, S. 8.『或少女の一生 —グレーテ・ミンデ—』佐藤新一訳，弘文堂，1940年。

32)「サラゴダのツェルノヴィッツ出身のパウル・ツェランによるポントワース近郊のパリで歌われた詐欺師と泥棒の歌」『パウル・ツェラン全詩集Ⅰ』中村朝子

訳，青土社，1992年，S. 363 ff.

33) アメリカの画家センダックによるグリム選集（27話）のタイトルにも用いられている。Sendak, Maurice : The Juniper Tree and Other Tales from Grimm. New York 1973. 邦訳『ねずの木　そのまわりにもグリムのお話いろいろ』矢川澄子訳，福音館書店，2003年。

34) Belgrader 1980.

35) 『注釈編』も改版の過程で補完・拡充され，1812／15年，22年，56年の三度刊行された。『昔話集』は『注釈編』も含めて兄弟の連名で刊行されている。『注釈編』の最終頁にはヴィルヘルムの名前のみが記されており，また序文もヴィルヘルムの『小論集』に収録されていることから，『昔話集』は主にヴィルヘルムが担当していたとみられるが，本稿では『昔話集』編纂に関しての方針においては兄弟が大筋で一致していたと考える。兄弟の編纂方針についてはGinschelに詳しい。Ginschel, Gunhild : Der junge Jacob Grimm, 1805-1819. Berlin [Ost] 1967.

36) Lüthi, Max : Märchen. 10., aktualisierte Aufl. Bearbeitet von Heinz Rölleke. Stuttgart 2004, S. 63.

37) Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Dritter Band. Dritte Auflage. Göttingen 1856 (Nachdr. Hrsg. v. Heinz Rölleke, Stuttgart 2006), S. 79, 282, 314, 361, 399参照。（以降，『注釈編』からの引用時は，Grimm 1856と記す。）その他，ヤーコプがサヴィニー宛ての書簡に6話の昔話を添付しているが，その中の「継母」がこの類話にあたる。Schoof, Wilhelm (Hrsg.) : Briefe der Brüder Grimm an Savigny. Berlin 1953, S. 430所収。これは末尾のリストに挙げたスウェーデンの類話によく似ている。

38) 『昔話集』初版第二巻序文。Rölleke 1986, Bd. 2, S. VIIf.

39) 『昔話集』第三版序文。Rölleke, Heinz (Hrsg.) : Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Vollständige Ausgabe auf der Grundlage der dritten Auflage (1837). Frankfurt a. M. 1985, S. 22.

40) ヤーコプは1849年に，アカデミーでの講義の中で当時のことをこのように回想している。Grimm, Jacob : Über Schule Universität Academie. 1849. In : Brüder Grimm Gedenken. Hrsg. v. Ludwig Denecke. Marburg 1984, Bd. 4, S. 14.

41) Seitz, Gabriele : Die Brüder Grimm. Leben-Werk-Zeit. Leipzig 1990, S. 99 f. ガブリエーレ・ザイツ『グリム兄弟：生涯・作品・時代』高木昌史・高木万里子訳，青土社，1999年，S. 236.

42) Grimm, Jacob : Deutsche Mythologie. Besorgt von Elard H. Meyer. 4. Aufl. 3 Bde. Berlin 1875–78 (Nachdr. Wiesbaden 1992). 北欧神話との関係については，Bd. 1, S. VII を参照。

43)『古エッダの歌』Lieder der alten Edda. Erster Band. Berlin 1815. これは，古ノルド語（韻文）で書かれた『セームンドのエッダ』（9–13世紀）の翻訳である。

44) Grimm 1856, S. 79.

45) Grimm J./Grimm W. (Hrsg.) : Altdeutsche Wälder. Kassel 1813 (Nachdr. Hildesheim/Zürich/New York 1999), Bd. 1, S. 1–30. これは，自費出版で兄弟が1813年より刊行した雑誌だが，購読者不足のため全3号で廃刊となった。

46)『パルチヴァール』加倉井粛之他訳，郁文堂，1974年，S. 149 ff.

47)「ペルスヴァルまたは聖杯の物語」『フランス中世文学集2』天沢退二郎訳，白水社，1991年，S. 141–323.

48) Grimm 1813 (1999), S. 1 ff. インド神に関しては，S. 17 f.

49) インド＝ヨーロッパ内に見られる近似性は共通の源によるものとし，それ以外のものについては，多元的発生を想定していたことが，注釈中の記述より分かる。Grimm 1856, S. 405. 中国と日本については Grimm 1856, S. 351を参照。

50) Schlegel, A. W. : Altdeutsche Wälder, herausg. durch die Brüder Grimm. In : A. W. Schlegel Sämmtliche Werke. Hrsg. v. Eduard Böcking. 16 Bde. Hildesheim 1971, Bd. 12, S. 391 f. シュレーゲルとグリム兄弟間の議論に関しては，谷口幸男「ゲルマン文献学の生成」『現代に生きるグリム』岩波書店，1985年所収に詳しい。

51) Grimm 1856, S. 79.

52) プルタルコスによれば，遺骸は十四に切断されている。プルタルコス『エジプト神イシスとオシリスの伝説について』柳沼重剛訳，岩波書店（岩波文庫），1996年，S. 40.

53) ウェルギリウス『牧歌　農耕詩』小川正廣訳，京都大学学術出版会，2004年，（農耕詩第4歌）S. 207.

54) 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店，1960年，S. 90. 傍点は筆者による。

55) Grimm 1856, S. 79.

56) Deutsche Sagen（1816/18年）．グリム兄弟が共同で刊行した伝説集。全二巻。「ハーメルンの鼠捕り（笛吹き）男」などが知られている。

57) グリム兄弟の注釈に指摘はないが，同じ伝説がゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』第8巻にも挿話として登場する。『ゲーテ全集7』前田敬作他訳，潮出版，1982年，S. 528.

58) Grimm, Wilhelm : Altdänische Heldenlieder, Balladen und Märchen. Heidelberg 1811, S. 84 f.

59) Grimm 1856, S. 79.

60)『司祭アーミス』藤代幸一訳，法政大学出版局，1987年，S. 38.

61) Grimm 1856, S. 79.

62)『エッダ』谷口幸男訳，新潮社，1973年，S. 260 f.

63) J. Grimm 1875 (1992), Bd. 1, S. 154.

64) J. Grimm 1875 (1992), Bd. 2, S. 689, 691. 別の姿で復活することは，今日のUngrichtの研究でも，古い信仰と関係があるとみなされている。Ungricht, Gabriela Brunner : Die Mensch-Tier-Verwandlung. Bern 1998, S. 150.

65) Grimm 1856, S. 79.

66)「スノリ『エッダ』「詩語法」訳注」谷口幸男訳，広島大学文学部紀要，特輯号3，1983年，S. 4 f.

67)『昔話集』の中にはもう一つ，終結部で男が石臼に潰されて殺される「コルベスさん」(KHM 41) という話があるが，グリムは注釈で取り上げていない。

68) Grimm, Jacob : Deutsche Rechtsaltertümer. 4. Aufl. 3 Bde. Leipzig 1899 (Nachdr. Darmstadt 1965), Bd. 2, S. 277.

69)「ギュルヴィたぶらかし」『エッダ』(谷口訳，1973年) S. 246.

70)「ヴェルンドの歌」『エッダ』(谷口訳，1973年) S. 96. Leyen, Friedrich von der : Das Märchen. Ein Versuch. 4. Aufl. Heidelberg 1958, S. 24などに指摘がある。

71) Leyen 1964, S. 70, Belgrader 1980, S. 26, Uther, Hans-Jörg : Nachweise und Kommentare. In : Brüder Grimm. Kinder- und Hausmärchen. Hrsg. v. H. -J. Uther. 4 Bde. München 1996, Bd. 4, S. 94.

72)『アイスランドサガ』谷口幸男訳，新潮社，1979年，S. 595 f.

73) オウィディウス『変身物語』中村善也訳，岩波書店（岩波文庫），1981年，上巻 S. 241 ff.

74) ウェルギリウス（小川訳）前掲書　S. 45 f.

75) Burkert, Walter : Vom Nachtigallenmythos zum "Machandelboom". In : Antiker Mythos in unseren Märchen. Hrsg. v. Wolfdietrich Siegmund. Kassel 1984, S. 113-125. Burkertは，オウィディウスや，ウェルギリウスが，古典教育で読まれていたことを証左とし，またヨーロッパの風習とも関連付けてみせるが，実証までには至っていない。

76) 神話と昔話の関係に関してはRöhrichの指摘がある。Röhrich, Lutz : Märchen und Wirklichkeit. 5. Aufl. Göppingen 2001, S. 134. およびRöhrich, Lutz : Märchen-Mythos-Sage. In : Antiker Mythos in unseren Märchen. 前掲書 S. 21.

77) Tatar, Maria : The Hard Facts of the Grimms' Fairy Tales. Princeton 1987, S. 5. タタール『グリム童話：その隠されたメッセージ』新曜社，1990年，S. 33 f.

78）拙論　2003年参照。

79）Grimm 1856, S. 79.

80）グリムの昔話の中の残酷さに関しては，Röhrich の前掲書2001年，S. 123–158や，野村泫『グリム童話――子どもに聞かせてよいか』筑摩書房，1989年を参照。

81）Belgrader 1980, S. 150, 334.

82）「三つのシトロン」では，王子が，クリームチーズを切る際に誤って指を切る。チーズの白色と血の赤色をした妻を得るため，彼は旅に出る。

83）Belgrader 1980, S. 29.

84）日本民話の会編『決定版　世界の民話事典』講談社（＋α文庫），2002年，S. 127.

参考文献

日本で出版されている類話のリスト

『完訳グリム童話集2』「びゃくしんの木の話」野村泫訳，筑摩書房（ちくま文庫），2006年，S. 295 ff.

『イギリス民話集』「ちっちゃな鳥」河野一郎訳，岩波書店（岩波文庫），1991年，S. 174 ff.

『スウェーデンの民話』「性悪な継母」米原まり子訳，青土社，1996年，S. 371 f.

『世界の民話3　北欧』（フィンランド）「まま母」小澤俊夫編，ぎょうせい，1976年，S. 50 ff.

『フランス民話の世界』「ちいさなオンドリ」樋口淳・樋口仁枝編訳，白水社，1989年，S. 187 f.

『イディッシュの民話』「モイシェレとシェインデレ」秦剛平訳，青土社，1995年，S. 93 ff.

『チェコスロバキアの民話』「鳥」大竹國弘訳，恒文社，1980年，S. 338 ff.

『イランの口承文芸』「妃を亡くした王様」竹原新訳，渓水社，2001年，S. 199 ff.

『世界の民話10　コーカサス』「アルスマン」小澤俊夫編，ぎょうせい，1978年，S. 218 ff.

『世界の民話9　アジア［I］』（シベリア）「木で彫った妻」小澤俊夫編，ぎょうせい，1976年，S. 268 f.

『アフリカの民話』「鳥の告げ口」北村美都穂訳，青土社，1995年，S. 488 ff.

『日本昔話集成　第二部』関敬吾著，角川書店，1950–58年，S. 957–82.「継子の鳥」「継子の笛」の85の類話が紹介されている。これらは，実話として語られることもある。（Ikeda, Hiroko : A Type and Motif Index of Japanese Folk-Literature. Helsinki 1971 (FFC 209), S. 167を参照。）日本の類話では，父親が子どもの肉を食べることはない。「継子の笛」においては，殺された子は鳥にならず，（竹の）笛が真実を暴露する。